

氏 名	向 坂 卓 也
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第16号（文部科学省への報告番号甲第531号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2014年7月30日
学 位 論 文 題 目	動詞述語文の脱時間的表現
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授 于 康 （副査）教 授 神 崎 高 明 教 授 大 高 博 美 村 木 新次郎（同志社女子大学大学院文学研究科特任教授）

論 文 内 容 の 要 旨

向坂卓也氏の学位申請論文は、「動詞述語文の脱時間的表現」と題して、動詞述語文をいくつかに分類し、いかにして脱時間化し、脱具象化された表現となりうるのかを中心に、そのプロセスやメカニズムを明らかにすることを目的としている。

本論文は、序論、5章、結論から構成されている。

「序論」

動詞述語文は典型的には動的で一定の時間の中で展開する。いっぽう、名詞述語文や形容詞述語文は典型的には静的で一定の時間の中で展開しない。しかし、「彼は関西学院大学を出ている」や「彼女は銀行で働いている」で用いられている動詞「出る」や「働く」は動作性の高い動詞であるが、動作を表しているというよりも主体の属性（「関西学院大学の卒業生である」「銀行員である」）を表している。属性を表しているという点で名詞的で脱時間的である。この論文においては動詞述語文をいくつかに分類し、いかにして脱時間化し、脱具象化された表現となりうるのかについて明らかにしていく。

「第1章 先行研究の概観と問題点」

時間的限定性や展開性との関わりについて、佐久間（1941）の「物語り文」、「品定め文」や三上（1953）の「動詞文」、「名詞文」をはじめとして研究者たちがこの問題に取り組んできた。動詞文でも「あの人は私の叔父に当たる」のように、動作性の低い場合は時間的限定性や展開性がない場合もある。先行研究では動作性の低い動詞述語文が脱時間的であると説明してきたが、動作性の高い動詞述語文が脱時間的になるプロセスについては十分に説明してこなかった。

「第2章 過去の出来事の脱時間的表現」

過去の出来事に関して、＜過去の出来事＞、＜属性の含意＞、＜歴史的事実＞、＜一時的結果状態＞、＜恒常の結果状態＞という分類を設定する。

＜過去の出来事＞は「太郎は大学の敷地を出ている」のように過去の出来事を表す場合である。＜属性の含意＞は「友人はアメリカに留学している」ということが「友人は英語が得意だ」、「友人はアメリカ通であ

る」ということを含意している場合である。＜歴史的事実＞は「湯川秀樹はノーベル賞をもらっている」のように、「湯川秀樹はノーベル賞受賞者である」ということが多くの人の記憶に刻み込まれている場合である。＜一時的結果状態＞は「窓ガラスが割れている」のように、結果状態が一時的に継続している場合である。＜恒常の結果状態＞は「太郎は大学を出ている」のように、「太郎は大学の卒業生である」という恒常的な属性を意味する場合である。

＜過去の出来事＞と＜一時的結果状態＞は時間的表現であるが、＜属性の含意＞、＜歴史的事実＞、＜恒常の結果状態＞は動作主体の恒常的な属性や特性を表すゆえに、時間限定性から解放された脱時間的表現となっていくのである。

＜恒常の結果状態＞と＜過去の出来事＞と＜一時的結果状態＞の相違に関しては、名詞述語文への言い換え、「V たての NP」などによってテストする方法を示した。すなわち、＜恒常の結果状態＞を表す「太郎は大学を出ている」は「太郎は大学の卒業生である」という名詞述語文への言い換えが可能だが、＜過去の出来事＞を表す「太郎は大学の敷地を出ている」や＜一時的結果状態＞を表す「窓ガラスが割れている」は名詞述語文への言い換えが不可能である。また「大学を出たての太郎」のように「V たての NP」構文で動作主が修飾されるのは、＜恒常の結果状態＞を表す「太郎は大学を出ている」が基になっている場合である。「*大学の敷地を出たての太郎」のように、＜過去の出来事＞が基になっている場合は動作主修飾ができないことを示した。

また「彼は大学を出ている」が＜恒常の結果状態＞（彼は大学の卒業生である）を意味するのか、＜過去の出来事＞（彼は大学の敷地を出ている）を意味するのかについては、時間・空間を表す語がマクロな場合が＜恒常の結果状態＞であり、ミクロな場合が＜過去の出来事＞であると論じた。ただしマクロか、ミクロかは相対的なもので、絶対的な基準ではない。

＜歴史的事実＞と＜過去の出来事＞の相違に関しては、「ことがある」の共起の有無によって区別することができる。すなわち＜歴史的事実＞を表す場合は「*湯川秀樹はノーベル賞をもらったことがある」とはいえないが、＜過去の出来事＞を表す場合は「私は作文コンクールで努力賞をもらったことがある」ということができることを指摘した。

＜属性の含意＞に関しては、「友人は英語に堪能である」や「友人はアメリカに詳しい」などの「特性」（評価）の理由づけとして、「友人はアメリカに留学している／留学したことがある」という過去の出来事が引き出されることを論じた。

「第3章 進行・反復の動作の脱時間的表現」

進行・反復の動作に関して、＜短期的継続動作＞、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜職業・身分＞という分類を設定した。＜短期的継続動作＞は「太郎は今、公園を走っている」のように短期間における継続動作を表す。＜長期的継続動作＞は「老人は山奥でひっそりと暮らしている」のように長期間における継続動作を表す。＜反復動作＞は「次郎は毎日公園を走っている」のように非連続の繰り返しを表す。＜職業・身分＞は「彼女は銀行で働いている」のように動作主の職業や身分を表すもので、「彼女は銀行員である」と言い換えることができる。＜短期的継続動作＞は時間的表現であるが、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜職業・身分＞は脱時間的表現である。

＜短期的継続動作＞は時間、空間という点で具体的だが、＜職業・身分＞や＜長期的継続動作＞や＜反復動作＞はいずれも抽象的である。＜職業・身分＞や＜長期的継続動作＞は基本的には「ている」形だが、＜反復動作＞は「する」形でも「ている」形でも使用可能であり、アスペクト対立がない。ただし、先行研究では、「職業」は「ている」形のみで表されるとされてきたが、本論では地の文で第三人称についての＜職業・身分＞を説明する場合は、「する」形を用いることが可能となることを明らかにした。このことは、

＜長期的継続動作＞においても同様である。

また先行研究では、＜職業・身分＞と＜長期的継続動作＞は同じものとして扱われていたが、本論では、「私は必死にトヨタ自動車で働いている」のように動作の様態を表すと許容度が下がる＜職業・身分＞と、「老人は山奥でひっそりとくらしている」のように動作の様態を表すことが可能な＜長期的継続動作＞を区別して論じた。＜職業・身分＞は動作の様態を表すことはなく、その意味において＜職業・身分＞は＜長期的継続動作＞よりも脱具象化が進んでいることを指摘した。

先行研究では＜長期的継続動作＞と＜短期的継続動作＞の違いを、「一日を超えるか否か」を基準としている。しかし、「一日」を超える継続動作であっても具体的な時間と結びつけば、＜短期的継続動作＞であると論じた。

また「彼は教えている」は、時間・空間を表す語がマクロか、ミクロかによって、＜職業・身分＞、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜短期的継続動作＞の意味に変わっていくことを論じた。ただし第2章でも論じたようにここにおいてもマクロか、ミクロかは相対的なものであって絶対的基準ではない。

「第4章 ＜恒常的特性＞を表す動詞述語文」

＜恒常的特性＞は「太郎はよく働く」や「この薬はよく効く」のように、ものごとの特性を表す場合であり、「太郎は働き者だ」や「この薬は効き目がある」と言い換えることができる。これらの表現は「太郎」や「この薬」がいつ、どこで働くのか、いつ、どこで効くのかということを意味しないという点で脱時間的である。先行研究では、＜恒常的特性＞を＜反復動作＞の延長として捉えてきた。「太郎はよく働く」は＜反復動作＞の延長として捉えることができるが、「この薬はよく効く」は＜反復動作＞の延長ではない。しかし、「作用の高さ」を意味する場合は＜恒常的特性＞を表すことができることを指摘した。

＜反復動作＞と＜恒常的特性＞の相違について、＜反復動作＞は限定された時間内における動作、特定の定指示的な空間における動作、定指示的な対象に対する動作を表すことができるのに対し、＜恒常的特性＞においては不可能となる、ということを明らかにした。例えば「最近、テレビでこの人をよく見る」や「新宿ゴールデン街でよく飲む」のように、「最近」のような限定された時間、「この人」「新宿ゴールデン街」などの定指示的な対象や空間が示されている場合は＜反復動作＞を表す。いっぽうで「アメリカ人は毎日よく働く」、「日本人はフランスの高級レストランによく行く」「彼はたばこをよく吸う」のように＜恒常的特性＞を現す場合は、「毎日」のような非限定的な時間、「フランスの高級レストラン」のような不定指示的な空間、「たばこ」のような不定指示的な対象が示されている。

「第5章 ＜普遍性＞を表す動詞述語文」

＜普遍性＞には二つの意味が含まれる。一つは＜普遍性・本質＞であり、もう一つは＜普遍性・当為＞である。＜普遍性・本質＞は「人間は嘘をつくものだ」のような文であり、＜普遍性・当為＞は「学生は学ぶものだ」のような文である。いずれも古今東西を問わない真実を表すもので、脱時間的表現としては最高位に位置づけられる。＜普遍性＞は「動詞＋ものだ」の形で表されることが多く、この表現を中心に＜普遍性＞を表す動詞述語文について検討を行った。

＜普遍性・本質＞は「*人間は嘘をつけ」のようにモダリティ制限があるが、＜普遍性・当為＞は「学生は学ぶ」のようにモダリティ制限がない。＜恒常的特性＞も「*太郎はよく働け」、「*この薬はよく効け」のようにモダリティ制限があり、モダリティ制限があるという点において、＜普遍性・本質＞を表す用法は＜恒常的特性＞との連続性を有している。＜恒常的特性＞は「この大学の学生はよく学ぶ」のように、他のもの（例：他の大学の学生）と比べた場合の際立った特徴を表すが、＜普遍性・本質＞は「お腹が痛い時はお腹に手を当てるものだ」のように「お腹が痛い時」の必然性を表すという違いがある。

また＜普遍性＞を表す動詞述語文における提題表現について検討した。＜普遍性・本質＞を表す場合は「人間 は／とは／って／って（も）のは／という（も）のは 嘘をつくものだ」のように、「は」「とは」「って」「って（も）のは」「という（も）のは」のいずれの提題表現を用いることができるが、＜普遍性・当為＞を表す場合は「政治家 は／とは／？って／って（も）のは／という（も）のは 国益のために働くものだ」のように「って」を用いると違和感が生じる。「って」には「捉え直し」の用法があるが、＜普遍性・当為＞は聞き手に対して「あるべき姿」を述べるものであり、「捉え直し」ではないので、「って」の許容度が下がることを指摘した。

＜普遍性＞を表す場合は基本的には「する」形だが、「ている」形が用いられる場合について指摘した。「モデルというのは、いつも文句を言っているものだ」のように「ている」形が用いられるのは＜普遍性・本質＞であり、＜普遍性・当為＞ではない。個別主体における個別の出来事を目撃して、一般主体の一般的な本質を引き出すのが＜普遍性・本質＞を表す「ものだ」であり、発見したときの怒りや驚きなどのニュアンスを伝えるには「ているものだ」の形で「ている」形を選択するのが効果的であることを指摘した。

「結論」

本論では、動作性のある動詞述語文の脱時間的表現について論じたが、対象を能動文の「する」「した」「ている」「ていた」形に限定して研究を行った。今後の検討課題としては、思考動詞、受動文、可能動詞文がいかんして脱時間化していくのかということや、動作性の低い動詞、名詞、形容詞がいかんして時間化していくのかということについて論じることが挙げられる。本論がある文が時間的か、脱時間的かを考える契機となること、また本論の成果が言語研究のみならず日本語教育研究や実践にも活かされることが期待される。

論文審査結果の要旨

向坂卓也氏の学位申請論文は、これまで十分に議論されてこなかった動詞述語文の脱時間的表現に着目し、動詞述語文脱時間表現になるプロセスやメカニズムを明らかにしようとするものである。

本論文の最大の特徴は、豊富なデーターを用いて、ほかの表現とのつながりや連続性をきちんと踏まえた上で、明快な論述で動詞述語文の脱時間表現のプロセスやメカニズムを明らかにしたことであろう。以下において、本論文のオリジナリティと独創性を中心に審査の結果をまとめてご報告申し上げます。

1. 先行研究の不備に関する的確な指摘

事柄の生起や展開、終結は、時間にかかわることが多いので、統語的には時間を表すマーカや表現が非常に豊富である。しかし、動作性の高い動詞述語文であっても、必ずしもすべてが時間にかかわるものではない。時間を表すマーカが伴われているにもかかわらず、時間にかかわらない表現は脱時間的であるとすれば、動作性のない、または動作性の低い動詞述語文がそれに該当しやすいことが予測される。

動作性の高い動詞述語文でありながらなおかつ時間を表すマーカと共起しているものであっても、時間には関係せず、恒常的特性や普遍性を表すものも多数存在している。しかし、先行研究では、これらの動詞述語文にはほとんど焦点を当てなかったためか、これらの動詞述語文がいかんして脱時間的になったのかといったプロセスやメカニズムについてはほとんど言及されていなかったのである。本論文は、まず先行研究の客観的分析から始まり、丁寧でなおかつ的確に先行研究の分析を行っていた。本論文の展開の合理性や必然性をサポートする首肯できる土台作りである。つまり、明確な研究の土台を構築することに成功したと考えられる。

2. 動作性の高い動詞述語文に関する脱時間のプロセスやメカニズムの究明

本論文は、動作性の高い動詞述語文に関する脱時間のプロセスやメカニズムを究明するために、「過去の出来事の脱時間的表現」、「進行・反復の動作の脱時間的表現」、「＜恒常的特性＞を表す動詞述語文」、「＜普遍性＞を表す動詞述語文」のように、四つの範疇に分けて論を進めている。この四つの範疇はそれぞれ個別のものではなく、すべてつながっており、前者が後者のプロセスになっている。

過去の出来事に関しては、さらに、＜過去の出来事＞、＜属性の含意＞、＜歴史的事実＞、＜一時的結果状態＞、＜恒常的結果状態＞に分けたうえで、脱時間のプロセスを明らかにしている。「太郎は大学の敷地を出ている」は＜過去の出来事＞を表すのに対し、「友人はアメリカに留学している」は「友人は英語が得意だ」「友人はアメリカ通である」のように＜属性の含意＞を、「湯川秀樹はノーベル賞をもらっている」は「湯川秀樹はノーベル賞受賞者である」のように＜歴史的事実＞を、「窓ガラスが割れている」は＜一時的結果状態＞を、「太郎は大学を出ている」は「太郎は大学の卒業生である」のように＜恒常的結果状態＞を表している。すなわち、＜過去の出来事＞、＜一時的結果状態＞、＜属性の含意＞、＜歴史的事実＞、＜恒常的結果状態＞は一つの連続を成しており、後者になればなるほど、脱時間的な表現になる。

進行・反復の動作に関しては、＜短期的継続動作＞、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜職業・身分＞のように四つのカテゴリーに分けられている。この四つのカテゴリーにおいて、いずれも「ている」と共起しているが、「太郎は今、公園を走っている」のように＜短期的継続動作＞だけが時間的表現であるのに対し、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜職業・身分＞はいずれも脱時間的表現である。

「太郎はよく働く」や「この薬はよく効く」のような表現は、先行研究で指摘されていた＜反復動作＞の延長ではなく、「太郎は働き者だ」や「この薬は効き目がある」と言い換えることができるように、ものごとの＜恒常的特性＞を表すものであり、時間との関係性がすでに消失したものである。

＜恒常的特性＞からさらに進むと、＜普遍性＞を表すことになる。「人間は嘘をつくものだ」のように＜普遍性・本質＞を表すものであっても、「学生は学ぶものだ」のように＜普遍性・当為＞を表すものであっても、過去の出来事にかかわる＜過去の出来事＞、＜属性の含意＞、＜歴史的事実＞、＜一時的結果状態＞、＜恒常的結果状態＞や進行・反復の動作にかかわる＜短期的継続動作＞、＜長期的継続動作＞、＜反復動作＞、＜職業・身分＞と違って、＜恒常的特性＞と同じように完全に脱時間的表現になっている。

すなわち、動作性の高い動詞述語文であっても、以上のような条件が満たされれば、脱時間的な表現になるのである。論証は、非常に綿密に行われており、因果関係ははっきりしているのも、理に適ったものであり、学術的貢献度が非常に高いと評価できると思われる。

本論文は、動作性の高い動詞述語文が脱時間のプロセスやメカニズムの明確化を試みるものである。この試みについては、審査員一同が高く評価している。前例を見ない試みであり、特に日本語研究のみならず、日本語教育においても、このような研究が非常に重要でかつ必要であるので、先駆的研究であると言えよう。使用されているデータは豊富で、論証も綿密であり、結論が首肯できるものである。本研究は、日本語の研究だけではなく、日本語教育研究全体にも大きな影響を与えるであろう。

このように、向坂卓也氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切ないというわけではない。マーカを伴う表現を中心に検討されてきたが、無標の表現にも目を向ける必要がある。有標表現と無標表現の全体像を明らかにして初めて、脱時間のメカニズムが浮き彫りになるであろう。これらの問題点は、今後の課題となるが、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決してない。

以上、審査員4名は向坂卓也氏の論文を慎重に審査し、2014年6月30日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、向坂卓也氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。